

(2)「エビは葉っぱを食べるんだよ」 4歳児12月

【D児の実態】

- ・1人で遊ぶことが多い。教師には自分の思いや考えを伝えられるが、友達への働きかけは少なく、友達のしていることにも気付かないことがある。

【教師の願い】

- ・友達に自分の思いを伝えられるようになってほしい。

【遊びの経緯】

- ・以前から数名の幼児がサメやチンアナゴなどを作って、水族館ごっこをしていた。水族館は数日残してあり、幼児が入れ替わり遊んでいた。

遊びの様子

____ 幼児の姿 _____ 教師の援助 _____ 変容

D、E、F児が廊下の水族館で作った魚や海の生き物を動かして遊んでいる。D児は教師と目が合うと、「知ってる？エビって葉っぱを食べるんだよ」と言う。教師が「そうなのね、知らなかったよ。あそこの木の葉っぱも食べるかな」と言う。D児は嬉しそうに木の近くに行き、食べているようにエビを動かす。

D児がエビを持って「Eくん、見て」と言う。E児はF児と話をしていて、D児に呼ばれたことに気付かない。D児はしばらくE児を見つめるが、反応がないためE児に背を向ける。教師が「Eくん気付いてないみたいだね。近くに行って呼んでみたら」と言う。D児はE児の隣に行き、「Eくん、見て」と言うと、E児は「なに？」と答える。D児は手招きしながら木の近くまでE児を連れていくと、「エビは葉っぱを食べるんだよ。だから木の葉っぱを食べているんだよ」と言う。E児は「すごい。そうなんだ。ねえFくん、エビが葉っぱを食べてるんだって」と言うと、F児は「おれも知ってるよ」と言う。D児はE、F児の隣で笑顔でジャンプをする。その後、D、E、F児がエビと魚と一緒に泳がせたりエサをあげたりすることを楽しむ。

【使用した教材】

- ・木(段ボール、色画用紙、積み木)、エビ(カラーポリ袋、トイレトペーパー、モール、セロハンテープ)

【考察】

- ・D児が自分なりに作ったり動かしたりして表現することを楽しんでいる。教師はその姿を受け止め、認めながら、周りにある環境を知らせることでD児の動きや場が広がり、友達と関わる姿につながった。
- ・友達と同じ場で遊んでいても、幼児の言葉や動きが周りの友達に伝わっていないことがある。教師が幼児のつぶやきや動きなどの表現に気づき、相手に伝えるための具体的な言葉や動きを知らせていくことが大事である。



IV 1年次の研究の成果と今後の課題

<分かったこと>

ごっこ遊びには、物を作る、なりきって動く、人とやりとりをするなど、いろいろな方法で自分の思いを表現する場面がある。ごっこ遊びを十分に楽しめるようにすることが、自己表現力を育むことにつながる。

○ごっこ遊びを充実させるために

- ・ごっこ遊びでは、自分が生活の中で見聞きしていることや経験していることを再現して遊ぶことが多い。幼児がどのような経験をし、何に興味があるのかを丁寧に読み取り、環境を構成していくことが大切である。
- ・見立てるだけでなく、動かして遊ぶことができるような物を取り入れることで、なりきる楽しさやそのものらしい動きを引き出すことができる。
- ・発達に応じて既成の物や本物を取り入れることで、容易に見立てることができたり、周りの幼児にイメージが伝わったりする。(既成の食べ物や病院ごっこの注射器など)
- ・衝立で場を区切ることによって安心してなりきったり、看板を立てることで場のイメージが相手に伝わったりするなど、場を作ったり必要に応じて環境を再構成したりすることが大切である。

○自己表現力を高めるために

- ・自分の思いを受け止めてくれる教師や気の合う友達がいることで、安心して自分の思いを出せるようになる。
- ・幼児の動きや視線、つぶやきなどの小さな自己表現を大切に、教師が受け止めたり周りの幼児との橋渡しをしたりしていくことで、受け止めてもらった嬉しさや満足感を味わい、さらに表現しようとする意欲につながる。
- ・自分の思いや考えを相手に伝えられるようになるためには、相手とは思いが違うことを経験し、折り合いを付けたり、相手によって伝え方を変えたりする必要がある。その姿について「アサーション」の視点から捉えることが大切である。

<今後の課題>

ごっこ遊びの充実に必要な教師の援助や環境の工夫を引き続き探っていく。さらに、ごっこ遊びの中で自己表現が難しい幼児や、自分の気持ちに折り合いをつけることが難しい幼児の変容を追い、自己表現力を育むために必要な教師の援助や環境の工夫を探っていく。

令和4年度ご指導いただいた先生

聖徳大学 大学院 教職研究科
教授 重安 智子先生

令和4・5年度文京区教育研究協力園 研究発表会
令和5年11月24日(金)

令和4・5年度 文京区教育研究協力園 (1年次研究報告書)

ごっこ遊びを通して、幼児の自己表現力を育む



I 研究主題について

幼児教育は、環境を通じた教育を基本とし、幼児の様々な資質、能力を育てていくことを大切にしている。幼児は、幼稚園生活の中で教師や友達に自分の思いや考えを表情や動きで表したり言葉で伝えたりして過ごしている。教師は、一人一人の幼児が安心して自分を表現する姿を大事にし、温かく受け止めたり友達に橋渡ししたりして援助している。本園では、幼児の自分を表現する力、つまり「自己表現力」を育てたいと考える。

本園の幼児は、自分の思いを表現して遊んでいるが、自分の思いを出すことが難しい幼児や、一方的な言い方になってしまう幼児もいる。コロナ禍でマスクの着用が日常になり、表情の変化が伝わりにくい状況もある。その中で自分の思いや考えを様々な方法で表すことは、その幼児のもつよさを十分に出し、自己を発揮することである。様々な人と関わる中で自己を発揮することにより生活や遊びが充実し、就学以降の学びに向かう力になると考える。そして、その後、幼児が社会に出た際にも、豊かな自己表現力は、他者と一緒に新しいものを生み出していく時に必要な力となる。

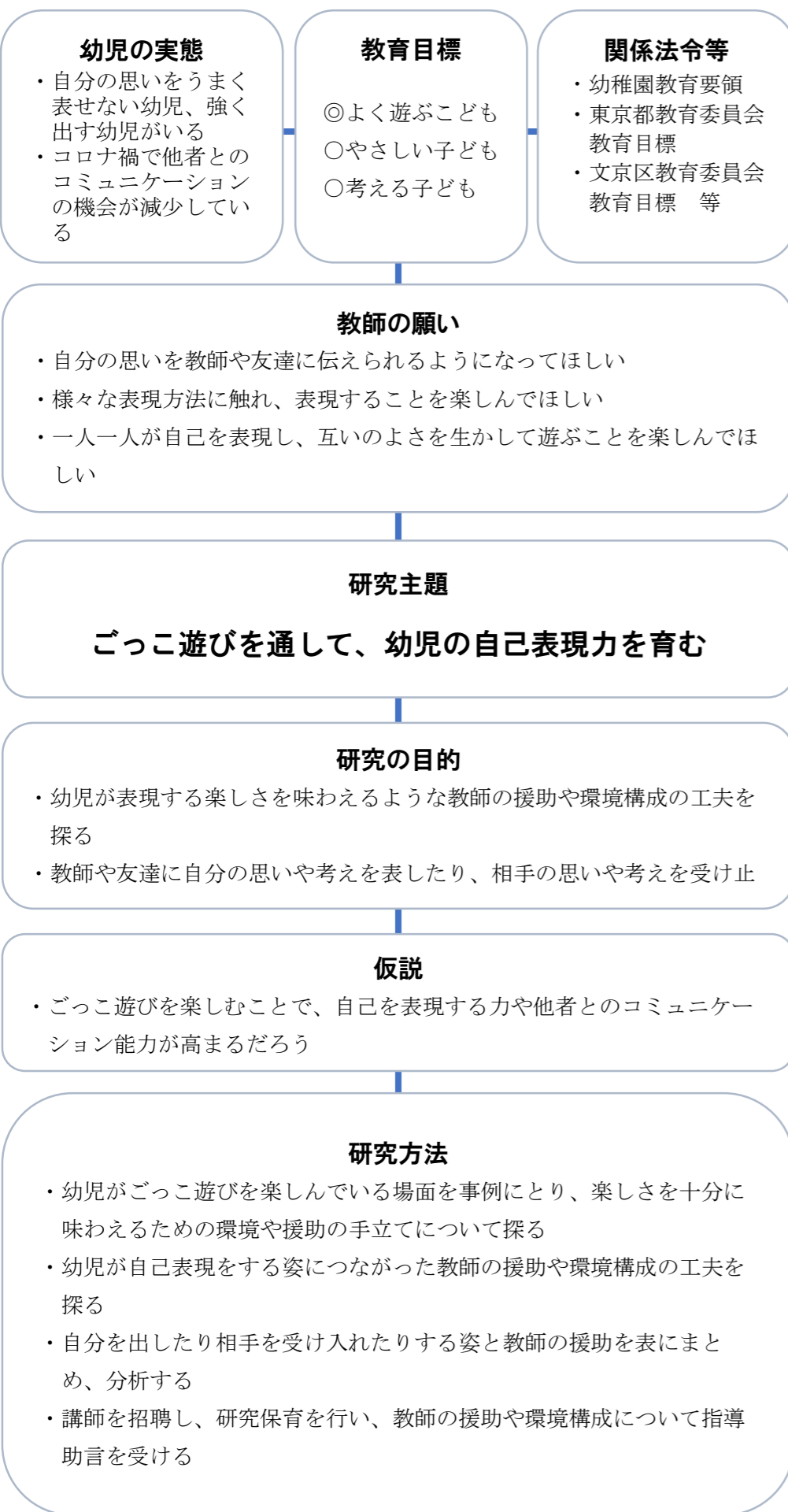
本園では遊びの中でも「ごっこ遊び」に着目し、幼児の自己表現力が育つような教師の援助や環境の工夫を探り、保育の質の向上を目指していくことにした。

文京区立湯島幼稚園

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-10-18

TEL 03-3814-9243 FAX 03-5689-4529

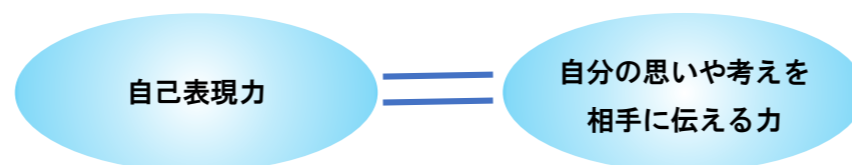
II 研究の構想図



III 研究の内容

1 自己表現力について

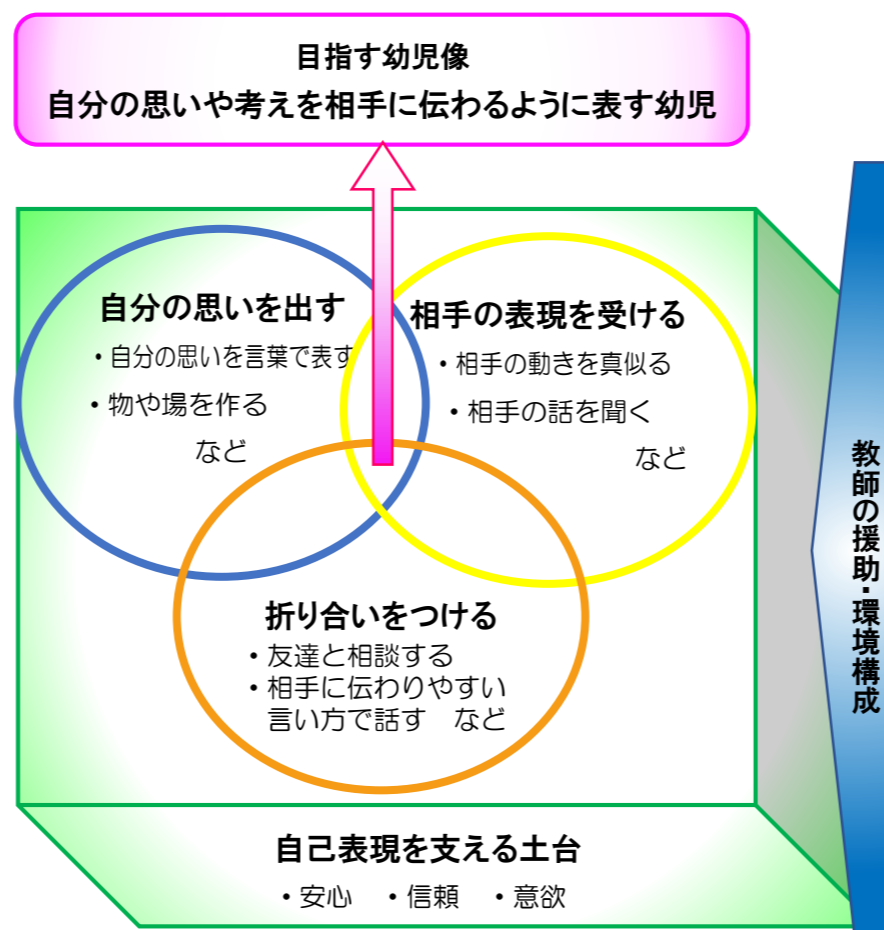
本園では話し合いの結果、自己表現力を以下のように捉えた。



自己表現力を育てるためには、安心して自分の思いを出せる肯定的な雰囲気をつくることが大切である。相手に伝わりやすく表現するには、言葉だけでなく、物、場、動きなど様々な方法の表現を大切にしていきたい。

2 研究のイメージ図

幼児が自己表現する姿を大きく以下の3つに分類した。3つがバランスよく育つことが大切であると考えます。



3 実践事例

個に焦点を当て、教師の願いを明確にし、幼児の動きやつぶやきを捉えて援助したところを事例にとった。エピソードを幼児の姿、教師の援助、変容に分けて分析をし、考察を行った。

(1) 「トマトを作ったよ」 3歳児11月

【A児の実態】

・入園当初から友達の様子をじっと見ていることが多く、自分の思いを出すことが難しかった。

【教師の願い】

・自分のやりたい遊びを見つけて楽しんでほしい。

【遊びの経緯】

・9月、周りの友達が遊んでいる中、座り込んでいることがあった。教師が、声を掛けて遊びに誘ったり、巧技台を組み合わせたりすると、体を動かして遊ぶことを楽しんだ。数日間は「今日もやりたい」と遊ぶ姿があったが、A児が自分で作れる環境ではなかったため、あまり続かなかった。

遊びの様子		
___ 幼児の姿	_____ 教師の援助	==== 変容
A児が「トマトを作ったよ」と京花紙を丸め、緑のシールを貼ったものを教師に見せに来た。教師が食べる真似をし、「おいしい」と言う		
と、A児は周りの幼児に見せて回る。B児がトマトを見て「これはなに？」と言うと、A児は何も言わない。そこで教師はトマトパックを用意し、A児が作ったトマトを入れて渡す。A児は嬉しそうにパックを受け取る。しばらくいろいろな幼児に見せて回っていたので、教師が「お店屋さんをするのはどう？」と提案し、A児と一緒にウレタン積み木を並べる。場が出来上がると、近くで遊んでいたC児がやってきて、「これください」と言う。A児は「どうぞ」と自分が作ったトマトを渡す。		
翌日、A児は自分から場を作るようになり、お店屋さんごっこを繰り返し楽しんでいった。		

【使用した教材、遊具など】

トマトパック、トマト（京花紙、シール）、ウレタン積み木

【考察】

- ・教師が幼児の作ったものを認め、幼児の思いに寄り添い関わったことで、A児は安心感をもち、自分から遊び始めた。
- ・教師が食べる真似をしたりトマトパックを提示したりしたことで、A児は自分の作った物やイメージしたことを相手に受け止めてもらう楽しさを感じることができた。
- ・誰が見ても分かりやすい物（トマトパック）を使うことで、A児が作った物のイメージが周りの幼児に伝わった。
- ・教師がA児と一緒に拠点となる場を作ったことで友達が集い、相手との関わりが生まれ、言葉で表現する姿につながった。
- ・幼児が自分で扱えるウレタン積み木で場を作ったことで、繰り返し自分から遊ぶ姿につながった。

